

氏名	中西 紗和
ヨミガナ	ナニシ サリ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第439号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 ブロンズ鑄造彫刻における存在と喪失 －「彫刻は墓である」という考察－ 〈作品〉 inward・um・inner・uh

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	原 真一
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	林 武史
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	深井 隆
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一

（論文内容の要旨）

本論文では、ロストワックス鑄造法という手法を用いブロンズ鑄造を行っている著者が、その行程の中の「原型消失」という現象に強く惹かれたことで、自ら制作した「物質」が「消失」することを彫刻家としてのどのように解釈してゆくのかを述べるものである。

また、自ら鑄造を行うことで、消失と再生が繰り返される鑄造制作と人間の身体の消失と再生という輪廻性が重なり、「喪失」を知覚することの重要性を述べるものでもある。

ロストワックス鑄造法はその始まりを紀元前まで遡ることができ、原型となるワックス（蜜蝋）を砂や石膏などの鑄型材で包みこみ、消失させ、その空洞に溶解した金属を流し込みワックスの原型を金属へと置き換える手法として現在も変わらずに続いている技法である。そして鑄物となった物質は、半永久的にこの地上に残るとされている。

しかし、ここでワックス原型からブロンズ彫刻への移行を単なる“置き換え”としてしまうことに見落としがあると私は考えている。なぜならば、原型としてつくられたワックスは、制作工程の中でブロンズになるために一度この世から消えてなくなるからである。これを「原型消失」という。

彫刻というものは、その物理的な存在それよりも彫刻を取り巻く空間、鑑賞者に残る記憶といった物理的には目に見えない「痕跡」のことも指示している。

最終的にブロンズという半永久的に残り、重みがあり、触れられる物質になることの背景にこの世から一度消失すること＝作者にとっての「喪失」といった見えない事実が起こっていることに着目することは、ブロンズ鑄造を行う彫刻家として彫刻を分析するひとつの入り口であると私は考えている。

そこで、彫刻における「喪失」について理解を深めるべく、制作方法を見直すこととなった。私はワックス原型の制作を人工的に温めることから自身の体温で行うことに変え、制作と生活を密着させた。作品をつくるときに自分の手元や作品を見ず、視覚の使用を止めて触覚に集中し制作を行った。また、「溶け消えること」への研究として溶解炉ようかいろの制作や鑄物の歴史を取材し、制作法を変えてからの成果を検証するため個展を行った。

その結果、制作する自身の身体が永遠ではないこととその身体が確実な記憶を持つこと、物質にも記憶が

あることを認識することとなった。ワックスの変形が腐敗に見え、自身の身体も喪失の前に腐敗してゆく事実を知った。

私は幾度となくこの技法を使い制作を行う事で、ロストワックス鑄造法とは何か儀式めいたものであったことを彫刻制作を通して直感的に身体で理解していたことに気が付いたのである。それは、ロストワックス鑄造法が人間の葬送の儀式であり、彫刻鑑賞は現代の葬送儀式の追体験といえるのではないだろうかというものである。

これにより、最終的にブロンズとなった彫刻は“喪失のサイン”として存在するのではないだろうかという結論に至った。それはまるで「墓」のように佇み、その根源に喪失が隠されていることを予感させるものとして。

墓も彫刻も、触れられる碑としての要素と、見えないエリアでの対話を試みるという両義的な要素を持ち合わせていることにおいて同類の存在といえる。

墓も彫刻も、その物理的な存在以上に人間の記憶を喚起させるスイッチとしての役割があるのではないだろうか。

本論では第一章を「喪失の気配」とし、古代から人間が向き合ってきた喪失について記録や文献を参照しながら喪失が生み出す可能性を探る。第二章では「喪失と再生」と題し、ロストワックス鑄造法の解説を葬送の儀式と重ね合わせて行い、自身の鑄造への思想を述べるとともに、鑄造彫刻と墓の関連性を見つけるきっかけとなった自身の作品、展示について述べる。第三章では「墓と彫刻」として、葬送法や墓の形態、民族儀礼などから墓と彫刻との関連性を裏付けてゆく。第四章「ファジィな身体」では彫刻制作、とりわけロストワックス鑄造という手法によって、自身の身体性を強く意識するきっかけとなった作品とその制作方法とそこから得た考察を述べる。第五章「記憶のフォルム」では、自身の作品と制作過程においての記憶の在り方についての考察、制作によって生まれた視点を述べ、終章「博士審査展作品」では2013年12月に行われた東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展にて発表した作品について言及する。最後に、ロストワックス鑄造法によって得られた結論をこれからの出発点としてむすびとする。

(博士論文審査結果の要旨)

中西紗和の論文『ブロンズ彫刻における喪失と存在——「彫刻は墓である」という考察』は、筆者が彫刻の制作と取り組みながら思索した成果をまとめたものである。

筆者である中西は、本学で彫刻を専攻し、とくにブロンズ鑄造という技法で制作を行ってきた。彫刻には、彫る(=引く)ものと、加える(=塑像など)があるが、ブロンズ彫刻というのは、それらに比して特殊な工程を経る。つまり一度造形したものが、ロストワックス法により空洞となり、その空洞が金属で満たされることで、最終的な彫刻として現れる。

筆者は、このブロンズ彫刻の制作過程に、哲学的ともいえる意味を見だし、その喪失と、そこから最終的に彫刻として「存在」することに自身の制作テーマを重ね合わせる。

本論文の第一章「喪失の気配」では、古代ギリシアのブロンズ彫刻や縄文土器、さらには古代ローマの遺跡ポンペイから出土した死者の形態などを例に、喪失というテーマに焦点を合わせ、それを続く第二章で、ロストワックス法という喪失と再生の問題を浮き彫りにし、それを「墓」というものの造形へと導く視点を設定する。第三章「墓と彫刻」では、具体的な墓を例に検証し、それをブロンズ彫刻と結びつける思考の糸口を探す。そして第四章以降、終章まで、自身の彫刻作品を例に取り上げ、その作品思想の展開が、そこまで浮き彫りにした筆者の問題意識とどのように重なるかを解説していく。

カントは、空間とは、あるモノが存在し、そのモノを取り去ったときに、そこに現れるのが「空間」であると、『純粹理性批判』等の著作で論じているが、筆者が探究している喪失と存在というテーマも、そんなカントの哲学に通じるものであるとも評価できる。さらに筆者は、その問題意識を、論文として文章とするだ

けでなく、それを彫刻制作という実践を通じて探究している。その彫刻は、たんなる美しいものの造形とか、世界の描写であることを超えて、世界のありようそのものを問いかけようという、造形の探究である。

このように本論文において、またそれと呼応するように彫刻において、筆者は問題意識を掘り下げてきた。とくに、その「存在と喪失」という彫刻のテーマを、墓の造形つまり人間の死というもっとも根源的な問題と、その空間造形において結びつけた発想・視点は独自のものである。そこから筆者の彫刻の、オリジナルな魅力も放たれてくる。そのような理由から、この論文の存在理由を評価できる。

よって、本論文を東京藝術大学の博士論文として合格としたい。

(作品審査結果の要旨)

中西紗和は本研究において、彫刻は墓であるという思考を導きだした。それは、申請者がロストワックス鑄造の制作過程で強く意識した、喪失感から生まれた。自身の身体の記憶を手がかりに、鑄造の際に発生した出来事や現象などから、目に見えない何ものかと向き合うことで、彫刻の原初を探っていく。

審査した提出作品は4点である。

作品展示の中でも、「uh」は、ブロンズとワックスを同じ土俵に並べることにより、ブロンズ鑄造の消失について、互いの物質の関係をより鮮明に提示した作品となっている。

作品「inner」は、箱の中に身体の記憶があるといった独自の解釈により、三つの箱に申請者のこれまでの鑄造彫刻の経緯を示す作品を収めた、インスタレーションである。自分の手の中に収まる小さなスケール感が、申請者自身のブロンズ彫刻への現実に即した想いであることを観る者に感じさせる。また、申請者の本研究での考察の変移が良く理解できる作品ともなっている。

作品「urn」は、申請者が本研究の喪失と存在を強く意識するロストワックス鑄造法をもとに制作したブロンズ作品である。壺のような中に何も無いものを造ろうとして始まった作品が、ある瞬間から顔に見えるようになったというもので、空洞から何か形を生み出す行為を端的に表している。この作品は観る者にブロンズという物質から受ける強い存在感のみならず、ある種の懐かしさを伴う、艶かしくそこに在るといった彫刻の本質を感じさせるものである。

作品「inward」は、展示会場で浴槽、舟、棺などを想起させる、ひときわ大きく存在感を誇示していたワックスの作品である。それは制作過程で感じた洞窟のような空洞を意識し、申請者がこれまでのロストワックス鑄造法との関わりから、必然的に生まれた作品であることを強く提示している。制作中に身体の中に墓を持つといった思惟が生まれ、空洞も物質も同等であるといった見解に到る研究の成果を明確に表す作品である。

本発表において申請者は、これら4点をひとつの表現とし、これまでの研究の流れとともに会場全体でインスタレーションしている。一つ一つの作品の持っている説得力は、申請者の研究過程での強い意識と思索の痕跡から生まれている。発表場所の空間と彫刻との呼応に細かな疑問もあるが、それを補って余りある魅力ある作品群であり、申請者の終始一貫とした研究態度から「彫刻は記憶のスイッチである」といった言葉を導きだした秀逸な研究発表である。

以上の結果、主査、及び副査を含めた彫刻科教員全員は、提出作品が博士学位授与に十分値すると判断した。

(総合審査結果の要旨)

中西紗和は、ロストワックス鑄造法を用いて作品を制作してきた。この技法を使いブロンズ鑄造彫刻を制作する過程で、原型が消失する事実に衝撃を受けた。自ら作った原型が一度この世から無くなる、この事実遭遇したことをきっかけに、物質としての彫刻の存在、彫刻の成立する場所といった彫刻において根源的ともいえるテーマについて模索してきた。

論文では、彫刻の起源は、ものが無くなった事実を埋めるためであると考え、その役割は「記憶の手助け」であったと捉える。様々な「喪失」の事例を通して、彫刻のありかたが、物質としての存在から人の記憶の中へと移行していく。原型が溶けて無くなり別の物質として再生される鋳造法を、人間の葬送の儀式と重ね合わせ、喪失を経て再生されたものとして、彫刻と墓との類似性を強く意識していく。「墓」とは、無くしたものを思い出すスイッチとして機能する空間と考え、身体の記憶、人間の記憶を喚起させるものとして彫刻が自立できる場所を見だし考察する。本論は原型の制作や工房での鋳造作業、また発表されたインスタレーション作品を通して、筆者が感じ、思考した様々な経験から導かれた言葉で綴られている。原型の素材であるワックスとの関わり方や独自の造形方法、また実際に展示された作品が変化していく過程や時間を丁寧に見つめ、筆者の体の中の記憶を呼び覚ましながら、「墓」としての彫刻を模索していく。論述全体に筆者の肉体的な感じさせ、借り物ではない言葉が強いリアリティーを感じさせる。

提出作品「inward」「urn」「inner」「uh」はそれぞれタイトルが添えられているが、あらかじめ独立した作品として制作されたものではない。中西の彫刻の特徴である、手の中に収まり持ち運び可能な大きさの、毎日制作され続けてきた小さなパーツ、ともいえる彫刻がランダムに配置されている。そのインスタレーションは、展示空間を意識して構成された1作品と見ることもでき、あたかも書き綴られた日記を切り取って並べ替えたような印象がある。ブロンズ、ワックス、パラフィン、砂といった素材が空間と有機的に繋がり、作者の体温、身体の痕跡、思考の経緯が小さな造形を通して身近な彫刻として感じられる。

「inward」は箱状の立体物である。あらかじめ作られた空洞にパラフィンを流し込んで整形された。つまり、「何も無い」ところの形である。それは「棺」を連想させ、同時に「死」を予感させるが、展示では「器」のように置かれていた。内包可能な広がりを含み、素材の透過性も相まって、より開放的な印象を与える。

中西の「墓＝彫刻」は暗く閉ざされた場所ではなく、見えないが確かに在る、何より「人」と共にあり、その空間はいつでも開かれ、繋がれる。この彫刻概念は独自のものであり、新たな表現の可能性を拓ける研究として高く評価できる。

以上のことから、論文、作品ともに博士学位授与に値すると判断し、審査委員一同、彫刻科教員全員一致で合格と認める。